ノート

薩摩永寿丸漂民について

木崎良平

一　はしがき

文化九年（一八一二年）一二月、紀州熊野灘で遭難し、千島のハラマコタン島に漂着、その後、オンネコタン島からカムチャツカのペテロパウロフスク、オホーツクを経て、再びカムチャツカに送られ、文化一三年（一八一六年）七月、ようやくにして択捉島沖に帰還した薩摩永寿丸漂民については、従来あまり知られないで来た。

彼らの出身地である薩摩の『鹿児島県史』（四巻、昭和一六年、鹿児島県刊）においても、その別巻『年表』の文化一三年五月の条に、「先年千島漂着の船間島船頭喜三左衛門等、カムチャツカより送還せられて帰国す。」とあるだけで、本巻中には、彼らに関する何らの記載もない。また、帰国後の喜三左衛門についても、彼が藩から苗字帯刀を許され、宅間の姓を賜わったらしいことが分っているだけで、その没年、墓所についても何も知られていない。

本稿は、この忘れられた漂民、薩摩永寿丸漂民について、彼らに関する史料、あるいは彼らの漂流・帰国経緯について述べ、ついで彼らと同様、江戸時代においてロシア勢力範囲へ漂流し、あるいはロシア人に捕えられ、ロシアに抑留せられた人々に考察を及ぼし、それらロシアへの漂流・抑留日本人全体の中で、薩摩永寿丸漂民の占める位置を明らかにし、さらにはその歴史的意義について論じようとするものである。

二　永寿丸漂民に関する史料

永寿丸漂民に関する報告として、一般にかなり知られてきたも

のは、『通航一覧』巻三二一（国書刊行会本、巻八）に収められている『漂流人喜三左衛門外二人口書』（文化一三年七月二〇日付）である。これは、喜三左衛門および弟の角次、水主の佐助が、択捉島帰着後、同島シベトロ番所において取調べを受けた際、提出した彼らの漂流次第に関する『口書』で、これは、のち同島のフレベツ会所における取調べの時、確定をみたものである。

なお、『通航一覧』同巻には、永寿丸漂民と一緒に帰国した尾張督乗丸船頭重吉（長右衛門）と水主音吉の『漂流人長右衛門外一人口書』（同月同日付）、および、シベトロ番所において彼らを取調べた択捉島詰松前奉行支配調役下役の村上貞助の一八ヶ条から成る『漂流人共相咄候儀別段書留置奉差上候書付』も収められている。

これらの『漂民口書』、『貞助書付』は、石井研堂校訂、『漂流奇談全集』（続帝国文庫、明治三三年、博文館刊）や、荒川秀俊篇、『日本漂流漂着史料』（昭和三七年、地人書館刊）に収録され、人々に知られて来た。なお、国会図書館や、東京大学史料編纂所に存する『永寿丸漂流記、別名薩摩国喜三左衛門船尾張国長右衛門船年月同時漂流記』（一冊、文化一三年）は、この『漂民口書』系統の一写本である。

漂民たちは、その後、国後島泊会所、松前奉行所での取調べを受け、さらに、文化一三年一二月九日以降、江戸霊岸島蝦夷会所において数度にわたり、勘定奉行兼松前奉行の服部伊賀守貞勝の吟味を受けたが、同年一二月一六日付の『魯西亜船より差戻シ候漂流人尾州名古屋小島屋庄右衛門手船督乗丸船頭長右衛門外四人口書』は、この蝦夷会所における取調べの際のものであり、服部鉦太郎著、『尾張漂流譚』（昭和一六年刊）中に載せられている。内容は、択捉島での『漂民口書』とほとんど同じである。なお、同書には『文化一四年丑年尾州半田村百姓吹流之一件』と題せられた択捉島シベトロ番所における『重吉口書』も収められている。

さて、喜三左衛門らは蝦夷会所における取調べも終って、明けて文化一四年二月二五日、帰藩を許され、江戸田町の薩摩藩別邸に引き取られた。喜三左衛門は、その時、薩摩藩の取調べに対し、漂流についての覚書、『船長呈書』というものを藩に差し出したらしい。喜三左衛門の郷里である現鹿児島県川内市の『川内郷土史』（浜田亀峰著、昭和三〇年刊）の下巻第六章の附として収められている『実記――魯西亜国漂着様子書』は、この『船長呈書』にあたるとも思われる。それには、文化一四年三月の日付がある。この『川内郷土史』所載の史料は、文化一四年六月、薩摩藩士伊知地季虔が写し取ったものから、昭和一五年四月、鹿児島県郷土史家の町田二次氏が書写されたものによっている。

薩摩藩では、その後、この『船長呈書』をもとにし、喜三左衛門らにも種々訊問して、文化一四年一〇月、江戸詰藩士木場貞良により『魯西亜漂流記』(二巻)という立派な漂流記が編集された。東京大学史料編纂所架蔵の『薩人喜三左衛門以下廿三人、魯西亜漂流記、上下、自文化九至同十四』がそれである。

また、喜三左衛門らが帰国して九年を経、文政八年(一八二五年)には、薩摩藩士川上親信があらためて藩公の命を受け、『漂民口書』や『貞助書付』、寛政五年〜文化元年(一七九三年〜一八〇四年)ロシアへ漂流、帰国した仙台漂民津太夫らの見聞を仙台藩医大槻玄沢がまとめた『環海異聞』(一五巻、文化四年成)を参考として、『漂海紀聞』(五巻)を著わした。鹿児島大学附属図書館に架蔵せられている旧島津久光蔵書「玉里文里」中には、その一写本(五冊本)がある。これは、昭和四〇年に、筆者が校訂し、鹿児島大学教養部世界史研究室の名で刊行した。

喜三左衛門らの漂流記には、その他に、『漂海紀聞』と全く内容を同じくする『北際漂譚』(五巻)と呼ばれるものがある。これには古賀侗庵らが写した宮内省本(三冊)や、桑名松平家の蔵本(五冊)、旧彰考本(五冊)、東北大学狩野文庫本(巻一の一冊のみ)などが知られている。この『北際漂譚』には、文政九年(一八二六年)の薩摩藩侍医曾占春(曾槃)の後序がある。当時の薩摩藩主は島津斉興であるが、彼の祖父、島津重豪は蘭癖と綽名されたほどヨーロッパ文物に興味を寄せ、実学を奨励し、種々の殖産興業政策を行なった。重豪は天明七年(一七八七年)に隠居したのちも、その子斉宣、孫の斉興の時代を通じ、天保四年(一八三三年)に亡くなるまで、藩主の後見人として、長く藩政を指導し、この曾槃などを聘して、農学百科全書とも言うべき『成形図説』(百巻)などを編集せしめた。永寿丸漂流記などの編纂も、海外のことに強い関心を持ったこの重豪が命じたものであろう。なお、この『北際漂譚』については、かつて、清野謙次氏が『太平洋における民族文化の交流』(昭和一九年、創元社刊)の中で紹介された。清野氏の紹介されたものは、穴戸昌氏旧蔵本で、馬場脩氏蔵の五巻三冊本である。

以上が、薩摩永寿丸漂民に関する基本史料であるが、ロシア側には一八一六年一二月二三日付のロシア閣僚委員会の薩摩漂民送還認可状などが伝えられている(ファインベルク著、小川政邦訳、『ロシアと日本』、昭和四八年、新時代社刊)。また、喜三左衛門が帰国して間もなくのこと、薩摩藩士寺師次右衛門正容は、彼からロシアの造船法、あるいは航海術などのことを聞き、『質問筆記』数冊を著わし、それに基づいて『渙象論』あるいは『造船彙稿』等の船舶製造法の書物や、それに附属した大小船舶図数十枚を書いた。

そして、文政五、六年（一八二二、二三年）ころには、皆吉鳳徳らの協力で資金をこしらえ、外国船を模した「いろは丸」を建造したが、このことに関する記事は島津家編集所編『薩藩海軍史』上巻（昭和三年刊）に見えている。

なお、永寿丸漂流については、喜三左衛門らとともに帰国した尾張督乗丸船頭重吉らの漂流関係史料が参考になることは言うまでもない。中でも、文政五年（一八二二年）一一月に、船頭重吉の直話に基づいて、三河国新城藩士池田寛親が著わした『督乗丸船長日記』（五巻）は有用である。これは、石井研堂編、『異国漂流奇譚集』（昭和二年、福永書店刊）や、玉井幸助校訂、『船長日記』（昭和一八年、育英書院）など数種の書物の中で印刷に附されている。

なお、以上の史料等により、筆者が永寿丸漂民に関して書いたものには、次のようなものがある。

漂海紀聞について（鹿大史学、一二号、昭三九）

ロシアと鹿児島（ロシア史随想、昭四二、明玄書房刊所収）

薩摩永寿丸の漂流記について（鹿大史録、二号、昭四四）

西洋型帆船の嚆矢「いろは丸」（鹿大史録、三号、昭四五）

ラショワ島人ヲロキセ（鹿大史録、七号、昭四九）

薩摩漂民の送還（鹿大史録、七号、昭四九）

喜三左衛門と重吉の出逢い（鹿大史録、七号、昭四九）

「漂海紀聞」中のアイヌ語（鹿大史録、八号、昭五〇）

三　永寿丸漂民の漂流経緯

以上の史料をもとにして永寿丸漂民の漂流経緯を示せば次の如くである。

(1)　文化九壬申年（一八一二年）一〇月一九日、薩州松平豊後守島津斉興手船、薩摩国高城郡水引郷船間島（現鹿児島県川内市船間島）の嘉太郎船、帆幅二三反、一二〇〇石積、永寿丸に江戸薩摩屋敷への廻米一四〇〇余石を積入れ、川内港出帆。

乗組員は、沖船頭喜三左衛門（船間島出身、禅宗、当時二九歳）、弟の水主角次（当時一九歳）、同じく水主の佐助（川内京泊出身、浄土宗、当時二四歳）の他、船間島出身の次右衛門（賄）、嘉左衛門、伊勢太郎、助右衛門、雲太郎、利八、袈裟太郎、太三次、喜兵衛、多左衛門、弥三次、源兵衛、および京泊出身の船右衛門（船親父）、仲一、孫太郎、休五郎、勘四郎、吉太郎、金太郎、儀助の計二三名と、上乗の薩摩藩士井上友助祐長、春成猪助兼明の総計二五名。

(2)　川内出帆後、出水郡出水郷脇元（現阿久根市脇元）に寄港、風待ち、文化九年一一月初旬出帆、同一二月一日瀬戸内小豆島に一泊、翌日出帆、鳴戸海峡を経て、三日、紀州熊野大島沖三里ほどの地点で、北西の風強く遭難、一四日間ほど太平洋を東南に漂流、

風向変り、以後、東から東北へ流される。

(3) 文化一〇癸酉年(一八一三年)一月中旬、風波おさまるも寒気強く、上乗士井上祐長、春成兼明、および水主ら計一三名、二月から八月の間に次々死亡。八月一一日、本船水船となり、五名の病人を含む生存者一二名、脚船に移る。東南および東風で、北西から西に走る。食糧なく、飢餓状態、流れ昆布で命を繋ぐ。九月二〇日頃、西の方に島一つ発見、同二四日夜、同島東南浦に漂着。この島ハラマコタン島、翌二五日明け方近く、東北の強風で脚船沈没、賄の次右衛門ら六名水死。

(4) ハラマコタン島岩壁上に打上げられた六名のうち、嘉左衛門、伊勢太郎、助右衛門の三名、六、七日して飢と寒気のため死亡。残る喜三左衛門、角次、佐助の三名は悪天候の中を岩陰に過す。一〇月二〇日頃、天候回復、佐助と角次は西浦へ向け同島探索、出稼猟に隣島オンネコタン島より来ていたアイヌに出会い助けられる。二日後、病気のため岩陰に残っていた喜三左衛門も救出される。さらに三日後、一〇月下旬、そのアイヌら一三名と渡海五里、オンネコタン島に渡る。

(5) オンネコタン島には、アイヌ三〇人ばかり、六、七軒の土室に、諸所に分れて住む。翌文化一一甲戌年(一八一四年)二月まで、佐助はヲロキセ(文化八年五月、ロシア艦ヂャナ号艦長ゴロウニンらと共に、国後島で捕えられ、文化一〇年九月まで松前に幽閉されていたラショワ島アイヌのアレクセイ)の母ヲヲトチャ、その夫アムトノの土室に、角次はその近所、喜三左衛門は五里ほど離れたアキンハ方に養なわれる。

佐助は日本人を恨むヲヲトチャに責め使われ、二月、角次とともにアキンハ方に逃げ来る。春、ヲロキセ釈放の報、オンネコタン島に達し、ヲヲトチャ前非を詫びるも、漂民らはアキンハ方で猟の手伝いなどをして過す。

(6) 五月一〇日頃、アキンハ同道、小舟三艘で海上一三里、ポロムシリ島(当時、アイヌ土室二〇軒ほどあり)に渡り、トヨン(酋長)のボロホロニキリイチ方に養なわれる。六月初旬、ロシア徴税役人一〇名ばかり、三隻の舟で来島、ヲロキセも同行し来る。六月下旬、ロシア役人らと、海上半里、占守島に渡る。七日滞在。

(7) 七月上旬、占守島より海上三里、カムチャツカのロパトカ岬に渡り、西岸伝いに舟で北上、途中三日、浜辺に野宿、ナヤヘ(現在のオゼルノフスキーか、当時戸数一〇戸)着、二泊。陸行一二里、コレキナ(ゴルィギナ、戸数一四、五戸)着。翌日、ペテロパウロフスクより出迎えのロシア役人ババテレンおよびコツロフら到着、米、茶、白木綿、じゅばん等を支給される。三日目、出迎えのロシア役人らと舟で出発、海岸伝いに北上三〇里、野宿七日にして

ボリシャヤ川の河口チョフカ（ズィカヴォ、戸数三戸、ロシア風丸木小屋あり）着、二泊。それより川舟で川を一〇里遡行、三日目にボソレツカ（ボリシェレツキー、戸数二〇戸）着、三泊。

ボソレツカよりプロトニコヴァ川を遡上一〇日余り、カバチャ（アバチャ、戸数五、六戸）着、一泊。急流をさらに遡上、ナチイカ（ナチキ、戸数五、六戸、ボリシェレツキーより三〇里上流の地点）着、一泊。それより山越二〇里、二日の陸行でコリャカ（コリャーキー、戸数七、八戸）着、三日間滞在、四日目、アワチャ川を下ること一五里、河口のアワチャ（戸数一〇戸）着、一泊。翌日、海岸沿いに西へ三里渡海、ガワニ（港の意、ペテロパウロフスクのこと、戸数五、六〇戸）着。時に文化一一年八月中旬であった。七月上旬、占守島発、八月上旬ボソレツカ着、一五日ほどのちペテロパウロフスク着という次第。

(8) 翌文化一二乙亥年（一八一五年）五月まで、九ヶ月間、ペテロパウロフスク滞在。その間、カムチャツカ長官代理イリヤ・ルダコフ海軍大尉の世話を受け、同役所内の建物に医師ニコライ・イムハルトと同居する。カムチャツカ長官のピョートル・リコルド（ゴロウニン釈放につとめたヂャナ号艦長）は、釈放されたゴロウニンとともにペテルブルグへ赴き留守。

同地滞在中、漂民らはイムハルトよりロシア語を学んだり、ゴロウニン事件の時、捕えられカムチャツカに連れ来られていた高田屋嘉兵衛の噂、寛政五年（一七九三年）遭難の仙台漂民でロシアに帰化した善六（ピョートル・ステファノヴィチ・キセリョフ）の噂、ナポレオン戦争終結の報などを耳にし、ゴロウニンのヂャナ号は廃艦となり、浜辺で倉庫となっているなどを目にした。

(9) 一八一五年（文化一二年）五月下旬、二〇〇〇石積ゼヲニシイ号（船長ワシリー・ノヴィツキー）に乗組み、六月初旬ペテロパウロフスク出港、ポロムシリ島とオンネコタン島の間を通り（この時、アキンハらに再会）、シリンキ島を右に見て、海上四〇日、七月中旬オホーツク（戸数三〇〇戸）着。同港では文化一一年に択捉島沖に行った聖ボリス・イ・グレーブ号を見る。オホーツク港長官ミハイル・イヴァノヴィチ・ミニツキーの世話を受け、二〇日間ほど滞在。

(10) 七月二三日（日本暦六月二九日）、ミニツキーはヲフセン・ミハイロヴィチ・スレドニー航海士に対し、漂民送還の指令を与え、聖バヴェル号（二〇〇〇石積、二本檣、ブリッグ型）に、漂民らを含め、五〇余人乗組、八月五日（日本暦七月一三日）、オホーツク出帆。八月二二日（日本暦八月一日）、択捉島沖一〇里ほどの地点に達す。北西の風強く、岸に近寄れず、一七日間ほど附近航行、一〇月三日（日本暦九月一三日）、カムチャツカへ乗戻る。

ペテロパウロフスクには、文化一〇年一一月遠州御前崎沖で遭難、メキシコ沖でイギリス船に救助された尾張督乗丸の船頭重吉、水主の音吉、半兵衛の三人が、文化一二年八月一五日に送られて来て居り、彼らと六人で同居越年。

(11) 文化一三丙子年(一八一六年)五月二八日頃、聖パヴェル号、船長スレドニーに乗船(男女総勢六〇人)、六月初、ペテロパウロフスク出帆。六月一一日、尾張漂民半兵衛船上で病死、海上一四、五日で択捉沖に達す。煙霧深く岸に近寄れず、なお西航して絵鞆(室蘭)沖一里まで進むも引返し、択捉水道で漂民ら五名は、スレドニーより脚船を貰い離船。時に六月二八日。強風のため得撫島東北岸に流れ着く。二泊、三〇日に同島東浦ワニナウに移り風待ち。

(12) 七月七日、ワニナウより択捉島東北端に渡海、二夜野宿、七月九日、同島北端アトイア岬を迂回、シベトロ番所に着。

シベトロ番所には調役下役村上貞助、同心木村十平、小山倉之助在勤、取調べを受け、『口書』提出。七月一四日、同心木村十平付添、高田屋嘉兵衛の弟嘉十郎の船で、同所発。同日乙今牛着、一七日出帆、ベットブ泊。一八日出帆、シャナ泊。二〇日出帆、フレベツ会所着。同地には調役高橋次大夫、調役下役塚田富次郎、山口茂右衛門、三橋勝十郎、その他同心、全部で二〇人ばかり在勤、取調べを受く。七月二〇日付で『口書』成る。

(13) 八月二日、塚田富次郎、三橋勝十郎、同心松井卯内、小笠原貢蔵、高田屋下人助四郎付添で、フレベツ出船。同日、ヲイト宿。三日ヲダシツ宿、四日陸行してナイホ宿。四泊、八日ナイホ出船、タンネモイ着。

八月一〇日、海上四里、国後島アトイアへ渡り、一二日、同所発、船で岸伝いにシラヌカドマリ、レブンイソ、チノミノチなどを経、一七日セセキ着、二泊。一九日、同所出帆、一挙に泊会所まで至る。取調べを受け、『口書』提出。同所には調役二人、下役二人、同心二〇人ばかり、計二五人在勤。

(14) 八月二四日、泊発、北海道本島に渡り、野付着、二泊。二六日、野付より松前まで約三〇〇里の道につく。閏八月一日、厚岸着。二九日有珠(白)着、同地善光寺で死没漂流民の回向。九月二日、松前東入口に着、町番所を経て、蔵町の牢屋敷に入れられる。

(15) 九月三日、松前奉行所で奉行本多淡路守の取調べ、五日、揚り屋に移され、以後再三の取調べのち、九月中頃『口書』成り、江戸に送付。漂民ら幕府の指令待ち、その間、高田屋嘉兵衛や、文化四年(一八〇七年)〜同九年(一八一二年)ロシア人に捕えられていた択捉島番人五郎次などと会う。

一〇月末、江戸よりの指令、松前着。一一月四日、塚田富次郎、松井卯内、村井荘三郎付添、松前藩船永昌丸、船頭市蔵で松前発、津軽御厩上陸、淡路屋忠右衛門宅に二日滞留。一一月六日御厩発、二七宿ののち、一二月四日江戸千住の中屋六右衛門方に着。翌五日、江戸霊岸島蝦夷会所に赴き、同長屋に松井、村井とともに居る。孔あき銭四八文の支給を受け、九日より勘定奉行兼松前奉行の服部伊賀守貞勝の取調べを受ける。一二月一六日付で、漂民らの最終的『口書』成る。

(16) 文化一四丁丑年（一八一七年）二月二四日、薩摩漂民、勘定奉行支配調役森覚蔵より呼び出され、帰藩の許可あり。二五日、江戸田町の薩摩藩別邸に引取られる。取調べ、三月、『船長呈書』成る。尾張漂民重吉、音吉は四月四日、それぞれ領主の尾張家、旗本河原林三郎左衛門に引取られた。一〇月、木場貞良の『魯西亜漂流記』（二巻）成る。文政八年（一八二五年）、川上親信の『漂海紀聞』成る。

四　ロシアへの漂流・抑留日本人

永寿丸漂民と同様、江戸時代にロシアへ漂流し、あるいはロシア側に捕えられて、彼の地に連行された人々を記録の中から拾い上げれば、次の如くである。

(1) 元禄大阪漂民

元禄八年（一六九五年）一一月、大阪の淡路屋又兵衛の船に、米、酒、木綿などを積み、大阪出帆、江戸へ向う途中遭難、七ヶ月ほど漂流ののち、一六九六年六月、カムチャツカの南部オパラ河口に漂着した大阪谷町の立川伝兵衛ら一行一五名。

漂流中二名溺死、漂着時原住民の襲撃を受け、二名が殺され、一一名捕われる。一ヶ月ほどして、伝兵衛のみカムチャツカ河支流ナネ河畔に連行さる。翌年七月、伝兵衛は当時カムチャツカ遠征中のアトラソフに見出され、一六九九年七月二日、アナドィルへ、さらに一七〇一年一二月末、モスクワへ送られる。翌年一月八日、ピョートル帝に謁、同四月一六日、砲兵省へ預けられ、一七〇五年一〇月一六日付勅令により、ロシア日本語学校教師となり、一七一〇年帰化、ガヴリエルと改名。姓はボグダノフと称したと思われる。（一七〇〇年六月二日付「アトラソフの報告」、一七〇一年二月一〇日付「アトラソフの第二の報告」、一七〇二年一月「伝兵衛の物語」、ベルグ著、小場訳『カムチャツカ発見とベーリング探検』昭一七、村山七郎著『漂流民の言語』昭四〇）。

(2) 宝永南部漂民

宝永六年（一七〇九年）冬、日本出航、遭難、一七一〇年四月、カムチャツカのアワチャ湾北方、カリギル湾ボブロウォエ海岸に

漂着した奥州南部出身と思われるサニマ（三右衛門）ら一行一〇名。漂着後、カムチョダールに四名、のちカムチョダールとロシア人の戦闘でさらに四名殺され、サニマら二名がヴェルフネ・カムチャツカ要塞に連行される。サニマは一七一三年のコズィレフスキーの北千島探検に水先案内人をつとめ、ポロムシリ島でロシア人に捕えられた択捉島アイヌのシャタイノと、ロシア人による最初の千島列島地図作成に協力。一七一四年、ペテルブルグに送られ、伝兵衛の助手として日本語教師となる。一七三四年に没したといい、ロシア名はイヴァンと言ったらしい。（ベルグ著、小場訳、前掲書）。

(3) 薩摩若潮丸漂民

享保一三年（一七二八年）一一月八日、松平大隅守島津継豊手船若潮丸に、米、紙、絹などを積み薩摩出帆、大阪へ向う途中遭難、一七二九年六月七日、カムチャツカのロパトカ岬とアワチャ湾の間に漂着した宗左、権左ら一行一七名。

上陸後、コサック五十人長シュティンニコフの率いる一隊に襲撃され、一五名殺される。宗左、権左は捕えられ、ヴェルフネ・カムチャツカへ連行、酷使されていたが、のち解放され、ニジニ・カムチャツカ、アナドィルを経、一七三一年ペテルブルグに送られる。一七三四年、アンナ女帝に謁、陸軍幼年学校の修道司祭に預けられ、同年一〇月二〇日帰化、宗左はクジマ・シェリツ、権左はデミヤン・ポモルツェフと改名。

一七三五年、権左はロシア語学修のため、アレクサンドロフスキー神学校に送られ、翌年、二人は科学アカデミー附属日本語学校教師に任ぜらる。同年九月一八日宗左没（四三歳）、権左は同日本語学校主幹アンドレイ・ボグダノフの指導と協力で、数種の日本語参考書を著わしたが、一七三九年一二月一五日没（二一歳）。（田保橋潔『近代日本外国関係史』昭一一、村山七郎『漂流民の言語』昭四〇）

(4) 南部多賀丸漂民

延享元年（一七四四年）一一月一四日、陸奥国南部領鹿角郡佐井の竹内徳兵衛船、多賀丸（一二〇〇石積）に大豆、昆布、鰯糟などを積み、佐井港出帆、江戸へ向う途中、同一一月二八日遭難、一七四五年五月一六日、オンネコタン島ウカモル湾に漂着した船頭竹内徳兵衛ら一行一七名。

漂流中六名死、上陸後徳兵衛死、生存者一〇名、五月一八日、毛皮税徴集人ノヴォグラブレンヌイおよびスロボドチコフらに見出され、ボリシェレツクに送致される。全員帰化。一七四七年、漂民利助（パヴェル・アレフィエフ、一七四七年死）病気で同地に残り、九名は九月一〇日オホーツク着、ヤクーツクへ送られる。磯治

（フォーマ・ラベデフ・メリニコフ、一七五三年死）、八兵衛（アンドレイ・レシェトニコフ、一七五三年死）、庄右衛門（グリゴリー・スヴィニン、一七六三年一月死）、伊兵衛（ヴァシリー・パノフ）、勝左衛門（ピョートル・チェルノフ）の五名はペテルブルグ日本語学校へ。同地で二名死亡、一七五三年、同学校のイルクーツク航海学校内移転に伴ない、翌年五月二七日、生存者三名、イルクーツク着。

同年、ヤクーツク残留組の三之助（イヴァン・イヴァノヴィチ・タタリノフ、一七六五年八月死）、利八郎（マトヴェイ・グリゴリエフ・ポポフ）、長助（フィリップ・ニキフォロフ・トラペズニコフ）、久助（イヴァン・アファナーシェフ・セメノフ）の四名、イリムスクへ送られる。一七六一年イルクーツク日本語学校へ。ペテルブルグ組と合流。やがて、二名死、生存者五名は日本語教師を続け、一七七三年には『日本語単語集』（三之助の子三八、アンドレイ・タタリノフ編の一七八二年一〇月二四日付で科学アカデミーに提出された露日辞典『レクシコン』の基礎となったもの）を作る。一七八六年までに相次いで没。（佐藤玄六郎『蝦夷拾遺』、最上徳内『蝦夷草紙』、村山七郎『漂流民の言語』、播磨稽吉「露国における日本語学校の沿革」史学雑誌三三の一〇、『通航一覧』巻三一六）。

(5) 伊勢神昌丸漂民

天明二年（一七八二年）一二月九日、伊勢亀山領白子村一見屋彦兵衛船神昌丸（一〇〇〇石積）に、米、木綿、薬種紙などを積み、白子浦出帆、江戸へ向う途中、同月一三日、駿河沖で遭難、天明三年七月二〇日、アリューシャン列島アムチトカ島に漂着した船頭大黒屋光太夫ら一行一七名。

漂流中一名死亡、アムチトカ島で七名死亡、天明七年七月一八日生存者九名同島発、八月二三日ウスチ・カムチャツカ着、ニジニ・カムチャツカに一年滞在、その間三名死亡。生存者六名は天明八年六月一五日同地発、チギリ、オホーツク、ヤクーツクを経て、寛政元年（一七八九年）二月一七日イルクーツク着。同年冬、水主庄蔵（フョードル・ステパノヴィチ・シトニコフ、一七九六年夏死）、寛政三年春、新蔵（ニコライ・ペトロヴィチ・コロトウイギン、一八一〇年死）帰化、同年イルクーツク国民学校附設の日本語学校教師となる。同年一月、九右衛門病死。船頭光太夫は同地滞在中の博物学者キリル・ラクスマンに伴なわれ、帰国願いのため、同年一月一五日発、ペテルブルグへ、エカテリナ二世に謁、帰国のこと許され、寛政四年一月二三日イルクーツク帰着。

同年八月九日（一七九二年九月一三日）、キリルの次男アダム・ラクスマン遣日使節に伴なわれ、光太夫、小市、磯吉の三名、エカテリナ号でオホーツク発、同年九月五日根室港着。小市は翌五年四月二日、同地で死亡。光太夫、磯吉のみ、同年五月七日、ラク

スマンとともに根室発、六月八日箱館着、同月二四日、日本役人に引渡される。（桂川甫周『北槎聞略』亀井高孝校、昭一二、『通航一覧』巻三一六～三一七、篠本廉『北槎異聞』北門叢書六）。

(6) 仙台若宮丸漂民

寛政五年（一七九三年）一一月二七日、仙台牡鹿郡石巻米沢屋平之丞船若宮丸（八〇〇石積）に、材木、米などを積み石巻出帆、江戸へ向う途中、同月二九日、岩城領塩屋崎沖で遭難、寛政六年六月、アリューシャン列島のアンドレヤノフスキー諸島の一島に漂着した平之丞息子の船頭平兵衛ら一行一六名。

漂着後、間もなく平兵衛死亡、残る一五名はウナラスカ島に渡り越冬、寛政七年四月三日同島発、ペテロパウロフスク経由、六月二八日オホーツク着。三班に分けられ、第一班八月一八日オホーツク発、寛政八年一月二四日イルクーツク着より、同年末までに順次イルクーツクに送られる。第三班の市五郎、途上ヤクーツクで病死。

生存者一四名中、善六（ピョートル・ステパノヴィチ・キセリョフ）、辰蔵（アンドレイ・アレクサンドロヴィチ・コンダラトフ）は寛政八年三月帰化、同年夏、善六は伊勢の庄蔵死亡のあと日本語学校教師補となる。寛政九年初め、八三郎（セミヨン・ゲレゴロヴィチ・キセリョフ）、民之助（イヴァン・メイトロヴィチ・キセリョフ）帰化。寛政一一年二月二八日、吉郎次病死。享和三年（一八〇二年）生存者一三名は、メルケリ陸軍中尉、伊勢の新蔵らに伴なわれ、三月七日イルクーツク発、ペテルブルグへ。旅中、左太夫、清蔵、銀三郎の三名、病気のため落伍。漂民一〇名四月二六日ペテルブルグ着、アレクサンドル一世に謁、茂次郎（ザハル・ブルダコフ）、巳之助（ミハイル・ジェラロフ）帰化。

六月一三日（ロシア暦七月一九日）、津太夫、儀兵衛、左平、太十郎の四名、第二回遣日使節レザノフに伴なわれ、ナデジダ号でクロンシュタット発、南米大陸迂廻、オアフ島を経て、翌文化元年六月一〇日（一八〇四年七月四日）ペテロパウロフスク着、通訳として同船した善六は下船。漂民四名は八月四日同地発、九月六日、長崎港外着。翌文化二年三月一〇日、日本役人に受け取られた。善六はその後イルクーツクに帰り、文化一〇年、ゴロウニン受取りのヂャナ号通訳として国後、箱館に至る。文化一二年、伊勢新蔵死後五年目、イルクーツク日本語学校正教師に任命されたが、翌年同校閉鎖、彼も間もなく没。（大槻玄沢『環海異聞』北門叢書四、大槻玄沢『北辺探事』北門叢書六、『通航一覧』巻三一八）。

(7) 南部慶祥丸漂民

享和三年（一八〇三年）一一月八日、陸奥国南部領北郡牛滝村百姓源右衛門船慶祥丸（五八二石積）に、塩鱈三万余本を積み、箱館

在臼尻村出帆、江戸に向う途中、同一一月二九日、総州九十九里浜沖で遭難、翌文化元年七月一八日、ポロムシリ島に漂着した船頭の継右衛門以下一三名と荷主よりの上乗一名の一行。

漂流中、上乗役、水主ら計八名死亡、ポロムシリ島漂着後、小舟で守占島に渡る。通りかかったアイヌの舟で八月中旬ペテロパウロフスクに至る。善六の世話になる。文化二年五月一〇日、レザノフ長崎より帰着後、帰国の望を絶たれ、六月中旬、小舟でペテロパウロフスク脱出、ポロムシリ島よりはラショワ島アイヌのマキセンの船で千島列島南下、ラショワ島で越年、さらにマカンルル島まで送られたが、そこより、小舟を貰い独力で渡海、文化三年七月二日択捉島シベトロ番所帰着。（羽太正養『休明光記』巻七、『通航一覧』巻三一九）。

(8) 文化魯寇樺太島捕虜

文化三年（一八〇六年）九月一二日、樺太クシュンコタンにおいて、フヴォストフ太尉の率いるユノナ号のロシア人に捕えられた同所番人酉蔵ら四名。ペテロパウロフスクに連行され、越年、文化四年四月二三日、択捉島ナイホ沖にユノナ号で至る。（羽太正養、『休明光記』巻七～巻九、『通航一覧』巻二八四～二八五、巻二九三）。

(9) 文化魯寇択捉島捕虜

文化四年（一八〇七年）四月二五日、フヴォストフの率いるユノナ号、ダヴィドフの率いるアヴォス号のロシア人に捕えられた択捉島ナイホ番所の番人左兵衛ら四名と、択捉島番人小頭五郎次、および五月二日、シャナで捕えられた同所勤番の南部家砲術師大村治五平および津軽家足軽の計七名。

津軽家足軽は翌日釈放。樺太島捕虜、択捉島捕虜一〇名のうち、五郎次と左兵衛を除く八名は、六月五日、北海道利尻島沖で放還され、翌六日宗谷番所帰着。

五郎次、左兵衛はオホーツクに連行されたが、同地滞留中、文化六年五月～同年一二月、および文化七年五月～文化八年五月の二度にわたり逃亡、ツングース部落を彷う。二度目の逃亡時、文化七年一二月左兵衛病死。五郎次はのち文化八年一二月イルクーツクへ送られ、仙台漂民善六方に寄宿、翌文化九年三月、同所発、五月オホーツク着、摂津歓喜丸漂民と合流、ゴロウニン釈放のため活躍するリコルドのヂャナ号で八月四日国後島センベコタン沖着、同八月一三日、日本役人に収容された。（『休明光記』巻七～巻九、『通航一覧』巻二八六～二八八、巻二九二、巻二九三、巻三〇九、大村治五平『私残記』森荘已池編、昭一八）。

(10) 摂津歓喜丸漂民

文化七年（一八一〇年）一一月二二日、摂津御影村加納屋十兵衛船歓喜丸（一一〇〇石積）に新酒積入れ、大阪出帆、江戸へ向う途

中、翌一一月二三日紀州三崎沖で遭難、文化八年閏二月八日、カムチャツカ半島中部東海岸に漂着した船頭平助ら一行一六名。

上陸後間もなく九名凍死、七名、ロシア人に救われ、三月一四日ニジニ・カムチャツカに至る。文化九年一月、同所発、マルカを経、四月ペテロパウロフスクへ。一五日ほど滞在、五月下旬オホーツク着。択捉島番人五郎次と会う。安芸川尻の水主久蔵は脚部凍傷のため残留、与茂吉ら漂民六名と五郎次は、リコルドのヂャナ号で、六月二六日オホーツク発、八月四日、国後島センベコタン沖着、同日与茂吉上陸、同一一日忠五郎上陸、同一二日五郎次と漂民四名上陸、日本役人に収容された。五郎次だけは翌一三日収容。

久蔵は文化九年八月オホーツク発、同一〇月イルクーツクに着、仙台漂民善六方寄宿。文化一〇年一月オホーツクに戻り、同年九月一七日、ゴロウニン受取りのリコルドに連れられヂャナ号で箱館着船、善六も通訳として同船。九月二六日、久蔵は日本役人に受取られる。(久蔵『魯斉亜国漂流聞書』木崎校、鹿大史録四、『通航一覧』巻三二〇)。

(11) 高田屋観世丸捕虜

文化九年(一八一二年)八月二日、択捉島シャナ出帆、箱館へ向う途中、八月一四日、国後島ケラムイ岬沖でリコルドの率いるヂャナ号に停船を命ぜられ、捕虜となった観世丸(六五〇石積)乗組の船主高田屋嘉兵衛、船頭吉蔵ら六名。

彼らはペテロパウロフスクへ連行され、吉蔵、水主の文次郎、アイヌのシトカは越年中死亡。嘉兵衛、金蔵、平蔵の三人は、文化一〇年五月二六日、国後島センベコタン沖へ、ヂャナ号で帰着。同日、金蔵、平蔵上陸、嘉兵衛は二八日上陸、日本役人に受取られた。(『通航一覧』巻三〇七~巻三一一)。

(12) 薩摩永寿丸漂民

文化九年(一八一二年)一二月三日、紀州熊野灘で遭難、文化一〇年九月二〇日、ハラマコタン島に漂着、オンネコタン島、ペテロパウロフスク、オホーツクを経、文化一二年八月択捉島沖に至るも風波のため上陸出来ず、ペテロパウロフスクへ帰り、翌文化一三年七月九日択捉島シベトロ番所に帰着した島津斉興手船永寿丸(一二〇〇石積)の船頭喜三左衛門ら一行二五名。三名生還。(木場貞良『魯西亜漂流記』、川上親信『漂海紀聞』、『通航一覧』巻三二一)。

(13) 尾張督乗丸漂民

文化一〇年(一八一三年)一一月四日、名古屋納屋町小島屋庄右衛門船督乗丸(一二〇〇石積)に、江戸からの帰り荷、大豆などを積み、伊豆子浦出帆、名古屋への帰航途上、同夜、遠州御前崎沖で遭難した尾張国半田の船頭重吉ら一行一四名。

漂流中一一名死亡。文化一二年二月一四日重吉、半兵衛、音吉の三名、メキシコ沖で英国船フォレスタ号に救助される。同号でアラスカのシトカを経、文化一二年八月一五日ペテロパウロフスク入港、薩摩永寿丸漂民と合流、帰国。帰国途上、半兵衛死。（池田寛親『船長日記』、『通航一覧』巻三二一）。

(14) 天保越後漂民

天保三年（一八三二年）秋、松前で北海物産を積み、江戸へ向う途中、三陸沖で遭難した越後早川村出身の次郎右衛門ら一行七名。漂流中三名死亡、天保三年一二月、オアフ島に漂着、一八ヶ月滞留、天保五年六月オホーツクに送られ、同所で一名死亡。天保六年アラスカのシトカへ。天保七年七月二五日、オルロフ大尉の率いる露米会社船ウナラスカ号で択捉島フレベツ沖に帰着。（『接著年表』）。

(15) 越中長者丸漂民

天保九年（一八三八年）箱館より北海物産を積み、江戸へ向う途中、一一月二三日、仙台唐丹港沖で遭難した越中富山古寺町能登屋兵右衛門船長者丸（六五〇石積）の船頭吉岡屋平四郎ら一〇名。漂流中三名死亡、天保一〇年四月二四日、太平洋上でアメリカ捕鯨船ゼームズ・ローバーに救助され、同年九月までに漂民七名順次オアフ島着。同島で平四郎死、生存者次郎吉ら六名は天保一一年七月オアフ島発、オホーツクを経、天保一二年九月アラスカのシトカ着。天保一四年五月二三日、ガヴリロフ少尉の率いるプロムイスル号で、択捉島フレベツ沖帰着。（古賀謹一郎『蕃談』、遠藤高璟『時規物語』日本庶民生活史料集成巻五）。

(16) 紀伊天寿丸漂民

嘉永三年（一八五〇年）一月六日、伊豆子浦出帆、紀伊有田への帰航途上、一月九日、駿河沖で遭難した紀州日高郡天田組薗浦新町和泉屋庄右衛門船天寿丸（九五〇石積）の船頭虎吉ら一三名。同年三月一二日、東蝦夷地沖でアメリカ捕鯨船ヘンリー・ニーランド号に救助される。虎吉らアメリカ組五名と、長助らロシア組八名に分けられ、ロシア組の長助ら六名は三月二八日、浅吉ら二名は八月一〇日、ペテロパウロフスク着。同地で一名死。生存者七名は嘉永四年六月同地発、沿海州アヤンを経て、同年一〇月シトカ着。嘉永五年六月二四日、リンデンベルグの率いるメンシコフ公号で、伊豆下田港着、同二九日、中木浦に小舟で上陸帰還。アメリカ組五名はハワイに送られ、広東経由、嘉永四年一一月二八日、長崎帰着。（『漂流船聴書』、荒川秀俊編『近世漂流記集』昭四四、『通航一覧』続輯巻九八）。

(17) 安政松前漂民

安政五年（一八五八年）九月三〇日、伊豆下田にロシア艦で帰着

した松前民伝九郎ら四名の沿海州への漂着民。(『維新史料綱要』)。

(18) 津田近江守家来

安政六年(一八五九年)四月、樺太島見廻り中、西海岸で遭難、六月一九日、ニコラエフスク着、八月一三日ロシア船マレチョロ号でクシュンナイ帰着の津田近江守足軽倉内忠右衛門。(『幕末外国関係文書』、鍬内保躬『北蝦夷地御用留』)。

(19) 慶応越中漂民

慶応元年(一八六五年)六月四日、佐渡島北方で遭難した松平加賀守領分越中射水郡六渡寺村平次郎船の船頭清八ら五名。ウラヂオストクに漂着。同年一〇月ロシア軍艦アメリカ号で長崎帰着。(『維新史料綱要』)。

(20) 慶応松前漂民

慶応二年(一八六六年)六月、宗谷海峡西で遭難、沿海州へ漂着した松前民栄吉ら四名。慶応三年九月三〇日、ウラヂオストクよりイギリス船で長崎帰着。(『維新史料綱要』)。

五 永寿丸漂民の意義

前節で見たロシアへの漂流・抑留日本人は、明らかに四つのグループに分けることができる。第一のグループは(1)〜(4)で、彼らは、まずロシア人に日本に関する情報を伝え、あるいは日本への通路の水先案内人をつとめ、あるいはロシア日本語学校の教師となり、露日辞典の編纂に従事し、日露関係開花の基礎的役割を果した。彼らはいずれも未帰還に終ったが、彼らに日本語を習ったロシア人、彼らの子供たちは、日本への通路の探検、通商交渉の通訳として、日本へ渡来した。スパンベルグ日本探検隊中のシェナヌィキン、フェネフ(一七四二年渡来)、ベニョーフスキー一行中の航海士補ボチャロフ(一七七一年渡来)、安永渡来のロシア人中のオチェレヂン、アンチピン(一七七八、七九年根室、厚岸渡来)、ラクスマン一行中のトゥゴルコフ、イヴァン・トラペズニコフ(一七九二年根室渡来)などがそれである。

第二のグループは(5)〜(13)で、ロシアのわが国に対する通商要求の手段として、遣日使節ラクスマンおよびレザノフが送還し来たった者、およびレザノフの通商要求を幕府が拒否し、険悪化した日露関係の中で、あるいは独力で帰還した者、あるいはロシア人に捕えられた者、あるいは日本側に捕えられたゴロウニン釈放要求のため送還されて来た者、および永寿丸、督乗丸の漂民たちである。彼らは、日本にロシアに関する情報を伝え、わが国におけるロシア研究の発展に寄与するところがあった。また、間接的にではあるが、日露外交史上に重要な役割を果した。彼の地に残った者たちも、日本語学校教師、通訳として活躍した。

第三のグループは、ゴロウニン事件落着後、しばらくの間を置いて、イギリスの東アジア政策の積極化、アメリカの広東貿易進出の企てと呼応して、ロシアが再び対日接渉を強化し、露米会社の船によって送還し来たった⒁～⒃の漂民である。そして、紀州漂民の送還を最後として、その翌年の嘉永六年（一八五三年）には第三回遣日使節プチャチンが長崎に渡来、ロシアはもはや漂民送還を名とせず、純然たる外交交渉による日露国交樹立の段階に入る。

第四のグループは、安政元年（一八五四年）成立した下田における日露和親条約以後、沿海州に漂着、帰還した幕末の漂民⒄～⒇である。

さて、永寿丸漂民はゴロウニン捕縛事件という日露関係緊迫時に漂流したが、彼らが北千島にあった文化一〇年九月、ゴロウニンは釈放され、その関係が沈静化した時期に帰国した。彼らの帰国以前には「ロシアからの最初の帰還漂民」として名高い大黒屋光太夫の一行、「わが国最初の世界周航者」と言える仙台津太夫一行があり、文化魯寇、ゴロウニン事件と世間を騒がせた大事件があった。永寿丸漂民は、これらの帰還民、大事件の影にかくされ、余り人々の注意を惹かなかった。また、彼らの漂流範囲が千島・カムチャツカ方面に限られ、ロシア本土に及ばなかったことにより、彼らの持ち帰った情報には、ほとんど目新しいものがなかったことにもより、彼らは人々に忘れさられたように思われる。

彼らと同時に帰国した尾張漂民は、それでも、一年四ヶ月という知られている漂流の中で最も長い漂流を経験したこと、その漂流記、池田寛親の『船長日記』が文学的にもすぐれた作品であったこと、また船頭重吉の書いた『ヲロシヤノ言』（文政四年、一八二一年頃）は、わが国最初の刊行された『日露対訳単語集』であること、などから有名になった。

しかし、永寿丸漂民が何らの意義も持たなかったわけではない。まず、清野謙次氏が『太平洋における民族文化の交流』（昭一九、創元社）で指摘された如く、一九世紀初期の北千島に関する報告として、彼らのもたらした情報はまことに貴重なものがある。また、彼らの帰国により、その漂流記が編纂されたことを通じ、南国鹿児島でも遠く北方のロシアに対する関心がたかまり、その国際的視野が広められるに至ったことも忘れられない。

漂流記と言えば、木場貞良の『魯西亜漂流記』や、川上親信の『漂海紀聞』は、伊勢漂民の漂流記、桂川甫周の『北槎聞略』、仙台漂民の漂流記、大槻玄沢の『環海異聞』、尾張漂民の漂流記、池田寛親の『船長日記』とともに、一八世紀末～一九世紀初めの四大漂流記の一を形成するものであり、のちの越中漂民の漂流記、遠藤高環の『時規物語』、古賀謹一郎の『蕃談』を合わせ、五大

漂流記の一と言える。

特に、そのロシア言語篇は、約八〇〇語の単語と、短い会話文一三例を収めて居り、かの『北槎聞略』(一二六〇語余)、『環海異聞』(約六五〇語)の言語篇とくらべ遜色のないもので、わが国におけるロシア語研究萌芽期の記念すべきものの一つである。『時規物語』の言語篇と合わせ、江戸時代における四大ロシア語集を形成している。

なお、喜三左衛門が覚え帰ったロシアの造船法、航海術などは、すでに述べたように、薩摩藩士寺師正容の『渙象論』、『造船彙稿』に盛り込まれ、文政五年頃の「いろは丸」の建造となった。のち、嘉永四年(一八五一年)六月、時の島津藩主斉彬は、この「いろは丸」のことを聞き、正容の実子、寺師宗道および市来四郎に、それに関する書物、図式等一切を差出すことを命じ、同年一〇月、一八反帆、三本檣のわが国最初の西洋型帆船「いろは丸」(第二いろは丸)の建造を開始、二ヶ年半の歳月を費し、安政元年(一八五四年)三月、ついにそれを竣工せしめた。永寿丸漂民のわが国西洋型帆船製造に残した影響も忘れることはできない。

さて、永寿丸漂民のロシア人による送還について、『通航一覧』の編者は、次のように註記している。「以往漂人を送こせしは、皆かれに要する事ありてなり、今度の護送はしからず。」(巻三二一)と。すなわち、伊勢漂民、仙台漂民の送還は、ロシアが漂民送還を名として、わが国に通商を求め来たったものであり、択捉島番人五郎次、摂津漂民、高田屋嘉兵衛らの送還は、ゴロウニン釈放のためであった。独力で帰国した南部慶祥丸漂民を別とすれば、のちの越後漂民、越中漂民、紀州漂民らも、露米会社によるわが国の開国を求める目的から送還されて来た。しかし、永寿丸漂民の送還の目的は、そうした必要あってのことではなかったと、『通航一覧』の編者は言っている如くである。

しかし、永寿丸漂民の送還を、単なる人道的見地からする送還であったと結論づけることは間違っている。文化一二年、最初に永寿丸漂民を択捉島沖に送り来たり、風や濃霧のため、彼らを上陸させ得なかった時、船長スレドニーは漂民らに、「船中にイルコフツカより日本に差上る書面もあれば、来年は是非とも当所に再渡来すれば、其節間違なく同道上陸いたさすべし。」と言ったと、『漂海紀聞』巻五に見えている。

また、漂民らの帰還後、彼らを取調べた村上貞助も、その『書付』の中で、「当年罷越候船中、イルコーツカより之書面持参仕候趣、口書中にも申立候に付、……相尋候処……アトイヤにて相別れ候節、相渡不申候間、大方当秋(オホーツカへ)帰帆之節、再渡来可仕儀に奉存候旨、同人申罷在候。」と書いている。

ロシア人が永寿丸漂民を送還し来たった目的は、このイルクーツクからの書簡を日本役人に手渡し、何らかの日本との交渉の手掛りを掴むことにあったと考えられる。今日、この書簡は伝わっていないが、その内容を窺う場合、思い出されるのが、文化一〇年九月二九日、ゴロウニン受取に際し、リコルドが松前奉行宛差出した一八一三年五月三日付のイルクーツク知事トレスキンの『感謝および懇親の書簡』である。その末尾には次の如くあった（『通航一覧』巻三一四）。

「両国人に於て、利益となる睦敷応対を立候為、予貴方大鎮台（松前奉行所）江相願候者、右之事付、貴方政家之思召御知らせ可被下候。扨又、両国人親懇結約之為、常に不動之福基を立べき所之睦敷応待には、双方より何れの時に至り可申哉、其時節御差図之儀、予君に相願候間、甲必丹イリコルドを経て、予に御答被下度存候。」

このトレスキンの書簡に添えて、リコルドはゴロウニンとの連名で、一八一三年一〇月一〇日付（文化一〇年九月二九日）書簡を差出し、「睦じき応対についての日本政府の考え、またその親懇結約のための両国使節派遣の時期」についての返事は、「明年（一八一四年）六月七月之中、兵器無之小船、エトロフ島之北部に見え可申候間、其節何卒蝦夷を以、右御答書被下置度、謹て奉願上候。」と申し出た（『通航一覧』巻三一四）。

これに対して、幕府は文化一一年一月二日、若年寄植村駿河守の名で、『ロシア船渡来時の取扱心得』を松前奉行に指示した。すなわち、㈠通信・通商のことはできないが、国境を立てることについては、日本側は択捉島を限り、ロシア側は新知島を限りとし、その間の島々へは、双方より人家を建てないこと、㈡漂流民送還のことは、得撫島までは差支えない、という方針を示した（『通航一覧』巻三一五）。

ついで、同年三月一日には「ロシア船打払猶予」の指令が出され、先の文化魯寇事件時の文化四年一二月九日付の「魯船打払令」（『通航一覧』巻二九五）が一時停止された。ここに、松前奉行支配吟味役高橋三平は、三月二一日箱館出帆、択捉島に赴いたが、順風なく、同島に着いたのは六月八日であった。時に、ロシア船は五月二四日（ロシア暦六月二九日）に姿を見せ、立ち去った後であった。このロシア船とは、永寿丸漂民らが文化一二年七月オホーツクにあった時、同港に停泊しているのを見た聖ボリス・イ・グレープ号で、ノヴィツキー航海士が指揮していた船であると思われる。

こうして、文化一一年の日本との接触が成功しなかったことにより、ロシア側は翌文化一二年、スレドニー船長をして、聖パヴェル号で永寿丸漂民を日本に送還せしめたのである。スレドニー

は、漂民送還を名とし、イルクーツク知事トレスキンの松前奉行宛『第二の書簡』を日本役人に手渡す任務を与えられていたものと思われる。

村上貞助の『書付』によれば、イルクーツクよりの書簡は二通あり、それを日本役人に手渡す時には、スレドニーが添書することになっていたという。その書簡はおそらく、日本との和親を求め、ゴロウニン事件等の不祥事の起るのを防止するため、何らかの処置を構ずることを求めたものであったろう。しかし、文化一二年の時も、翌文化一三年七月の再渡来の時も、この書簡は日本役人に手渡されることなく終り、永寿丸漂民の送還は単なる放還に終ってしまった。

ロシア側では、一八一六年一一月一〇日（文化一三年一〇月四日）付で、シベリア総督ペステリはネッセリローデ外相に対し、「漂流日本人を送還し、トレスキンの書簡を日本側に届け、ロシア船が二度も空しく通ったことを彼らに伝えさせること」についての許可を求め、同年一二月二三日（日本暦一一月一七日）、ロシア閣僚委員会がこの許可を与えた時には、すでに当の永寿丸漂民は帰国し、松前を経て、江戸への途上にあった。当時、ロシアはナポレオン戦争後の経済的困難な情勢下にあり、またイルクーツク日本語学校も、教師は仙台漂民善六のみで、成果を全くあげることができず、経費節約を理由に、一八一六年七月二六日（日本暦七月一四日）付をもって閉鎖された。その上、一八一八年にはレザノフの右腕および後継者として露米会社の発展につとめたアレクサンドル・バラノフが没し、米英の積極的な北太平洋進出策と相まって、同会社による東方経営も消極化した。日本側でも、ロシアの進出が鈍化して、その後ロシア船の渡来するものなく、北方の脅威が薄らぐとともに、文政四年（一八二一年）には幕府は蝦夷地の直轄支配を解き、これを松前藩に返還した。

永寿丸漂民の送還は、ロシア側にとっては、ゴロウニン事件を契機としての日露交渉の場を摑むためのものであり、日本側にとっては、千島方面における日露国境画定の機会となるはずのものであった。もっとも、実際には、事の行き違いにより、彼我の接触はなされずに終ったとは言え、日露国境について幕府が『ロシア船渡来時の取扱心得』で示したところは、一般にもそのように認識されたように思われる。木場貞良の『魯西亜漂流記』の序文にも次の如くある。

「蝦夷地東ノカタ、海ヲ阻テ、諸島散在ス、今、エトロフ島ヲ限リ、蝦夷ノ属島トシ、大日本国域ノ榜示ヲ建ラルトナリ、ウルップ島ハ何レノ国ニモ属セズ、シモシリ島以東ノ数島、魯西亜ニ隷ス」と。

（立正大学文学部教授　　）